フレーベル祭の前後に

京都 平安女學院保育科　大塚喜一

『兩親たる者は其兒童の助によつて自分の缺陷を補ふべきである』

この言葉はフレーベル先生原著ハウ女史譯「人の教育」第二章第四十二節（一三一頁）の始に記されたる言葉である。この書物は小生が學生時代に數回繰返して讀んだがわかり難くて困つたものであつて、この言葉等は其當時も難解に苦しんだものゝ一つであつた。今日でも「父」としての體驗を有せざる身であるから、わからうとするのが無理かも知れぬが、しかし現在の教職に就いて自分の今日まで歩み來りし道を回顧する時、確にそうだとうなづき得るのである。先日も講義中にフレーベル先生の事を語りつゝ、父母も教師も同じく教育者たる共通の「道」に沿ふてこの言葉を自分の身の上に移して生徒に感謝の心を披瀝したのであつた（ザルツマン原著村上氏記「教師と父母との再教育」參照）

この心境は、昨年五月號の本誌の卷頭の言にて「**教育はお互である**」なる文字が吾人の眼を射た時の所感として六月號三八頁に

「若き處女達と共に教育を學んで來た月日尚淺きにも拘らず、如何に自分が「教育される教育者」であるか、幸にして斯くあり得たいといふ自己がはぐくまれてゐる社會に對する感恩の心である。云々」。

と述べたる所を前後の關係をよく御讀み下されば凡そわかつて頂ける事と思ふ。教師でさへ斯くあり得るなら、まして自分の子を有する親として殊に「お母さん」としてこの感如何に深きものがあるであらうか。小生はかねてより敬慕してゐる「お母さん」にして「保姆さん」たる或る先生にこの言葉を申上げたところ「あゝ、さうですが」と感慨深げな面持でゐられた。「先生はお母さんとしてこのフレーベル

先生のお言葉をごうお受入れになりますか。」

とお尋ねした。何事も思つたまゝ自ら感じたまゝにすなほに云ひ表はされる先生も、この時は靜に考へ込んでゐられたらしくすぐにはお答にならなかつた。（註、昨年六月號「ある保姆さんとの話」參照）

今年のフレーベル祭も近づいて記念の集りをしやうと相談してゐた時、小生は又この言葉を持出して先生の御體驗に立脚しての御教示を乞ふた。先生は「それはI先生にお尋ねなさい。あの先生は五人の子供さんのお父さんなのだから」と云はれて、話題を轉じて小生に一册のパンフレットを示された。それは東京の渾沌社發行の「渾沌」第十二卷第十一號「**フレーベル夫人號**」であつた。「フレーベル先生のあの御生涯に於てこの夫人が如何に大切なる働きをしてゐられるかがよくわかります」とて一讀をすゝめられたので、借りて歸つて讀んだ。フレーベル祭までに讀み終りたかつたが所用多くして果さず、當日の集りを終つて歸つたのはたそがれ時であつた。夕食後その日の會の印象を記し本誌を通じて讀者諸氏と倶にフレーベル先生を偲ぶよすがにもと、その參考を既刊の「幼兒の教育」各號の中より探索する中、色々つながりのある興味多き記事が目にとまり、あれもこれもと引出した。その中にて此際特記したきは

第三十二卷第四號　フレーベル誕生百五十年

企圖（フレーベル）

である。

此稿は、その夜から思ひを起して書き始めたものである。

*

『フレーベル夫人號』を讀んで特に茲に諸賢と倶に深く考ふべきは次の言である。

『ウイルヘルミヲの精神生活に於ける更に重大なる問題は、彼女がフレーベルと相知る以前に於て、不幸なる結婚の苦しみを嘗めたと言ふ事情である……。春雨一度去つて、野花忽ち開く。不幸なる結婚の苦惱を通して、ウイルヘルミヲの女性としての本質は完成せられたのであつた。女性としての自覺、女性の本質の完成、それは同時に母性としての自覺でなければならない。勿論彼女は一子をも產まなかつたのであるが、一子をも產まざりし彼

女が、幼き兒童の慈母となり得たのは、かゝる自覺によるものと言はなくてはならない。生後九ヶ月にして母を亡ひ、未だ曾て慈母の愛に接したことの無いフレーベルが、世にも稀に見る程に、母の子に對する愛の重大性を說いたのは、自己の求めて得られざりしものを、尙求めて止まざる思慕の念の表はれであるが、彼は之を自己よりも二歲年長のウィルヘルミヲ夫人に見出すことが出來たのである、苦しみを通して彼女が女性としての自覺に入つた事は、フレーベルと求婚時代に交換した手紙によくあらはれてゐる。「私達婦人は苦惱と否定とを通して形成せられ、男子は行爲と行動とを通して形成せられます」。「又私は最も高きものを信じます、神樣の不思議な加護を信じます、私は此の信仰のもとに幾千の苦惱に今迄堪えて來たのです。」

……

『フレーベル教育學の對象は人間の教育であつた。人間の教育は其の萌芽たる幼兒の教育が最も大切である。而して幼兒の教育は母性、或は一般に女性の微妙なる心情によらなくては不可能である。其の理由はフレーベルによれば幼兒の生活は女性の心情を外にしては存在し得ないし、又女性の心情は幼兒への愛を拔きにしては存在し得ない。畢竟、幼兒の生命と女性の心情は言葉の上では二つであつても其の本質に於ては一つのものである。フレーベル教育學に占むる女性のかゝる位置、それは實にフレーベル生涯の教育活動に占むるウィルヘルミヲ夫人の位置の縮圖に他ならぬではないか。かく見來るときウィルヘルミヲ夫人はフレーベルの協力者であると同時に、其の精神上の母である。云々。』

この稿の最初に引用せる言葉とこの文とを相對照して讀む時、吾人はフレーベルに於ては、肉體上の親であるか否かよりも「**精神上の母たること**」が幼兒の生命を保育する上に更に根本的に云へば人間教育の大業に參する上に最も大切なる**はたらき**を爲すものと解せられる。而して「幼兒の生命と女性の心情とはその本質に於ては一である」とのフレーベルの信念を以てすれば、この本質を保育し生成せしむる事により、すべての女性は精神的に更に切言すれば人

（以下六一頁へ）

爺(1)　まだ灰をまいてゐる、

大判小判櫻の花の組、このグループの中の櫻の花だけ一人或は二人位づゝ順々に立ち、他の大判小判は座つたまゝでゐる、

其他の組はまだ座つたまゝでゐる、

○ぼうびは澤山おくらに一ぱい、

爺(1)、爺(2)、臼、犬　四人手をつなぎ元氣に右廻りに歩く、

大判小判櫻の花の組、これも皆立つて元氣に右廻りに歩く、

瓦瀨戸かけの組、これも他の組と同じく皆立つて元氣に右廻りに歩く。

尙唱歌は第六節まで御座いますがこれを省き、第五節でこのお遊戯をめでたしめでたしと致しました、

以上は皆で歌をうたひ乍ら致します、そして規則めいた事、例へば右足から出るとか、何歩歩くとかいふ樣な事は全く考へずに、子供のなすがまゝに致しました。本當につまらないもので御座いますが、何かの御參考にもなれば幸と存じます。

(四三頁ヨリ)格的に人間の萌芽たる幼兒の母たり得るの資質を體得するに至るのではあるまいか。斯く考へ來つて始めの言葉に歸る時、母たる資質の中にてフレーベルが特に吾人に啓示する所は卽ち『**其兒童の助によつて自分の欠陷を補ふ**』といふ態度であると思はれる。かの「子供から學べ」なる常套語はこゝに女性と幼兒との本質的關係に立脚したる嚴肅深き意義を以て吾人に啓示せらるゝに至つたのである。

フレーベルのこの言葉に就て小生は更に小原先生の譯書(一〇三頁)及英譯書を參照したところ、多少その意味を異にするを見出したので、更に京都帝大の岩井先生にドイツ語の原書に就てお尋ねしたのである。そこでこの稿は一まづ此處にて打切り、次號に於て諸賢と倶に詳細に忠實にフレーベル先生の眞意の存する所を研究して行きたいと思ふ。斯かる研究は淺學なる小生一人の能ふ限りではないので、此方面に就てかねてより深甚なる關心を以て研究せられつゝある諸先覺の先生方より來月號の本誌に御高見を寄せられむことを切望する次第である。

(昭和九年四月二十六日車中にて第一稿擱筆大阪驛上り列車便投函)